公民館の図書室は　学びの入口・みんなの本棚

図書室月報

2023年（令和5年）4月5日
第719号

国立市中1－15－1
TEL.042-572-5141
FAX.042-573-0480
国立市公民館

図書室をご利用ください

―市民の本棚として公民館活動の資料室として―

公民館図書室には約二万五千冊の蔵書があり、「市民の本棚」として利用していただけるよう、一人でも気軽に利用できる場として運営しています。新聞の閲覧や、本・雑誌を借りることが出来ます。

公民館では市民の皆さんが参加できる講座や催し物を随時行っており、そのテーマ・内容に関連した本を優先してそろえています。このように、公民館主催の講座や市民の学びと密接に結びついていることが、公民館図書室独自の特徴です。

■図書室のつどい

毎月一回開催しています。文学・社会科学・自然科学・時事問題等、さまざまなテーマの本をとりあげ、著者に来ていただきお話を聞く催しです。

著者の話を直接聞くことでそのテーマ・課題への関心や理解がより一層深まります。

■図書室月報の発行

ご覧になっているこの「図書室月報」は、公民館図書室の利用者や講座参加者に原稿を寄せていただき、掲載しています。一ページ目は「図書室のつどい」等の講座参加者の感想や、読んだ本の感想を載せています。最終ページの「私の本棚から」は、お一人に六回連続で、興味を持った本などについて、感想や紹介を書いてもらっています。

紙面を通しての交流や学び合いの場となるよう毎月発行しています。

■市民グループの発行物・ミニコミ収集

市内で活動するグループや団体が発行しているチラシ・冊子等のミニコミ誌を収集して、閲覧できるようにしています。様々な市民活動を集積・記録し、共有するという公民館図書室の役割として行っているものです。

グループ活動で発行・出版したものがありましたら、ぜひ図書室にご寄贈ください。

■くにたちブッククラブ

年間のテーマを設け、日本文学から八作品を選び、参加者の読みの発表と講師の講義ですすめる読書会です。

二〇二三年度は「記憶の欠片をひろい集めて」をテーマに開催します。今号三ページ目に年間の予定を載せています。

公民館図書室の本や雑誌を借りたいときは？

ーくにたち電子図書館ー

国立市に在住・在勤・在学の方で、図書カードをお持ちの方は、パソコン・スマートフォン・タブレットなどから利用できます。

本や雑誌を借りるためには、「くにたち図書利用カード」が必要になります。

- □ くにたち図書館のカードをお持ちの方は、そのままお使いください。
- □ カードをお持ちでない方は、新たに登録をする必要があります。住所が確認できる健康保険証、運転免許証などをお持ちください。
- □ 国立市に在住・在勤・在学の方、国分寺、府中、立川、日野の市民の方は本を借りることができます。
- □ カードは５年ごとに更新が必要です。

※詳しくはお問合せください。

ブッククラブから

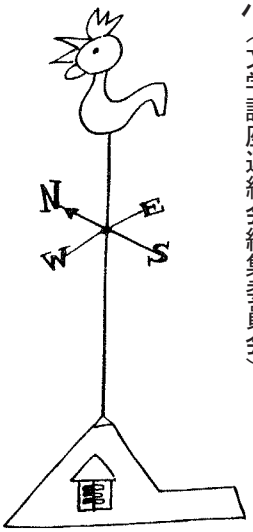
今年度を振り返って

岡本 修治（文学講座連絡会編集委員会）

二〇二二年度くにたちブッククラブの文集は、講座参加者の感想を中心にまとめられています。ここでは岡本修治さんが書いてくださった「あとがき」の文章を紹介します。

今年度、私は7回、ブッククラブに参加しました。いつものことですが参加者の熱量に圧倒されてしまいます。こういうことは日常ではなかなか味わえないので貴重な場所だと思っています。毎回、大学の先生から解説がいただけるのですが、一体どうしてこういうことが出来るのだろうと思いながら参加しています。長い歴史があるようなので、きっと何かの絆（物語）があるのだろうなと想像しています。

自分とは違う読み方をされる方に出会って、毎回「見る眼を見開かされ」そして「驚き」をいただいています。実は、私の読み方はちょっと変わっていて、作品のみに特化して読んでいます。あまり作者の履歴や他の作品は考慮しないことにしているのです。作品にバイアスをかけず白紙で読みたいなという気持があるからです。（もっとも、知らない言葉などに出会うと、もちろん辞書やネットでしらべますが。）ロラン・バルトという評論家が「作者の死」ということを言っていて、作品がテキストとして読者の前に現れたら、どう料理するかは読者に委ねられる、というようなことを言っています。それもそうだな、と思いました。それゆえ作品と差しで勝負するつもりで読んできました。だから当然、作者の意図するところには届いていません。しかし、私はそれでいいと思っています。ここは研究発表の場ではなく、作者の「文学として書かれた文字の軌跡」から何を想起するのか、という自分との闘いの場だと思っているからです。



それから言うと、確かに今年度の作品群には、ひとつの色を感じました。全体としては「動じない作品」というような言葉でくくれるのではないかと私は思いました。

今年度のテーマは「感傷から遠く離れて」でした。「感傷」はセンチメンタル。私のイメージでは「お涙頂戴」的な小説のことだと思います。確かにそういう作品はなかったなと思います。どの作品も「流されない」、「強いメンタリティ」を持っていたと思います。

井上荒野、金原ひとみ、水上勉、宇佐美りん、奥泉光、福永武彦、松田青子（10月の田中康夫には私は不参加）と皆、太い背骨を持って生きているような気がする。人物像がはっきりしていて、あいまいではない。そういう意味では、年間のトーンが全体に貫かれていたのではないか、と思いましたし、この時代での生き方の指針をいただいたようにも思います。

今回の作家たちの発想力には舌を巻きます。私も創作をやっているのですが、私はふところが狭くて、おどおどした書き方になるのですが、読ませていただいた作品は、どれも、おおらかに「自分の世界」をゆうゆうと泳いでいる。大したものだと思いました。

また、ここに集う、ベテランの方々の自信に満ちた論評や新しい方の純な感想を聞くと、自分の読みの浅はかさに気づかされます。また、新しい年度も、新鮮な驚きに期待して続けていきたいと思っていますのでよろしく願います。

文集できました！

文集をお読みになりたい方は
公民館図書室まで
お越しください。

〈くにたちブッククラブ〉

記憶の欠片をひろいあつめて

この講座では、参加者それぞれの作品を読んだ感想や講師のお話を聞いて、「読み」を深めます。今年度のブッククラブでは、「何の意味もないように見えていても、必要な出来事である（あった）」というありきたりな物語にはおさまらない、解釈をすり抜けてしまうような作品を読んでいきます。ただそこにある（あった）出来事の欠片をひろい集めることで、見えてくる風景とは。一人ひとりに違った景色が見えてくる、読書を通してそんな体験がきっとできるはずです。

月日	作品	講師
5／11（木）	藤野可織『ドレス』（河出文庫）	山岸　郁子（日本大学・日本近代文学）
6／8（木）	山田詠美『ファーストクラッシュ』（文春文庫）	榎本　正樹（文芸評論家・現代日本文学）
7／13（木）	佐藤泰志『きみの鳥はうたえる』（河出文庫）	大木　志門（東海大学・日本近代文学）
9／21（木）	川越宗一『熱源』（文春文庫）	内藤　千珠子（大妻女子大学・近現代日本語文学）
10／12（木）	村上春樹『女のいない男たち』（文春文庫）	深津　謙一郎（共立女子大学・日本近代文学）
※11月（木）	今村夏子『むらさきのスカートの女』（朝日文庫）	佐藤　泉（青山学院大学・日本近代文学）
※12月（木）	安部公房『箱男』（新潮文庫）	大野　亮司（亜細亜大学・日本近代文学）
1／11（木）	小川洋子『約束された移動』（河出文庫）	小平（おだいら）　麻衣子（慶應義塾大学・日本近代文学）

とき　夜7時半～9時半
ところ　公民館　地下ホール　定員　30名
申込先　4月13日（木）朝9時～
公民館　☎（572）5141

※11月・12月は市民文化祭の日にちが決定次第お知らせします。

新着図書から

〈歴史〉
戦争の世界史　マイケル・S．ナイバーグ（ミネルヴァ書房）209
佐高信評伝選1・2　佐高信（旬報社）281

〈社会科学〉
真理の語り手　重田園江（白水社）311
魚は数をかぞえられるか？　ブライアン・バターワース（講談社）481
スマホ・デトックスの時代　ブリュノ・パティノ（白水社）493
うたに刻まれたハンセン病隔離の歴史　沢知恵（岩波書店）498
おとなは子どもにテロをどう伝えればよいのか　ターハル・ベン・ジェルーン（柏書房）316
人権の世界史　ピーター・N・スターンズ（ミネルヴァ書房）316
ウクライナ戦争　小泉悠（筑摩書房）319
東アジアと朝鮮戦争七〇年　崔銀姫（明石書店）319
死刑のある国で生きる　宮下洋一（新潮社）326
沖縄と国際人権法　阿部藹（高文研）329
年収443万円　小林美希（講談社）365

〈工業〉
日本の香り物語　宮沢敏子（八坂書房）576

〈芸術〉
新海誠　土居伸彰（集英社）778

〈文学〉
死者は生者のなかに　西成彦（みすず書房）902
古典と日本人　前田雅之（光文社）910
百人一首　江橋崇（大学出版局）911
光のとこにいてね　一穂ミチ（文藝春秋）91い

図書室のつどい

『琉球切手を旅する』
―米軍施政下沖縄の二十七年―

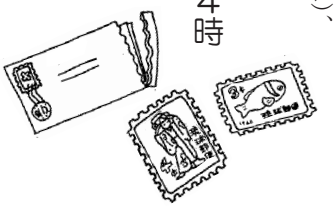
講師　与那原（よなはら）恵（けい）（ノンフィクション作家）

みなさんは「琉球切手」をご存じですか。終戦後、米軍施政下の沖縄では、本土や海外へ手紙を送るために、沖縄独自の琉球切手259種類が発行されました。その図柄は南国の植物や魚、文化財や工芸品、紅型模様など多岐にわたります。図柄の美しさや鮮やかさ、セント表示に目を奪われる琉球切手ですが、その背後には苦しい米軍施政下で生きる人々の希望も込められていました。

今回の図書室のつどいでは、沖縄にルーツをもつ著者の与那原さんをお招きし、灰燼に帰した沖縄戦終結後、郵政事業が再開された経緯、切手の図柄が描かれるまでの背景や、それを描いた美術家たちの肖像、本土復帰までの沖縄の暮らしや社会情勢等についてお話いただきます。琉球切手を通して見えてくる戦後沖縄史に耳を傾けてみませんか。

〈与那原さんの本〉
表題作、『首里城への坂道－鎌倉芳太郎と近代沖縄の群像』、『赤星鉄馬消えた富豪』（いずれも中央公論新社）、『まれびとたちの沖縄』（小学館101新書）ほか。

とき　5月20日（日）　昼2時～4時
ところ　公民館　地下ホール
定　員　60名（申込先着順）
申込先　4月13日（木）朝9時～
公民館　☎（572）5141



〈私の本棚から　第1回〉

三浦しをん著『風が強く吹いている』

今村 三郎

私の長距離走の記憶は全員参加の中高校時代にさかのぼります。練習時に女子の前で気分が悪くなり嘔吐し、ずっと下を向いていたり、本番ではビリ近くで拍手に迎えられたりしました。あまりいい記憶はないんです。箱根駅伝は正月の風物詩として、テレビで観戦していました。たまたま正月を箱根で過ごし、直に箱根駅伝を見ました。放送車の横を走る選手は、細い身体できゃしゃでしたが、短距離走なみの速さで走ってゆきます。

しばらくして、この本を手にしました。初めて見たとき、寛政大学という無名大学が10人の部員しかいないのに、箱根駅伝に出場するという夢物語かという印象。でも読み始めると、かれらのひたむきさや、手に汗握る戦況が語られ、夢中になります。

ハイジ（灰二）とカケル（走）という、走ることに実績と能力にめぐまれた二人が、ひょんなことで、出会うことから物語は始まります。ハイジは新入生のカケルに、おんぼろの安アパート竹青荘を紹介します。住人は、それぞれ個性のある10人で、箱根駅伝の区間数と同じなんです。ある計画を胸に秘めたハイジが彼らにいいます。「十人の力を合わせて、スポーツで頂点を取る」「うまくいけば、女にモテるし就職にも有利になるだろう」説得とも、脅しともいえるやり方で彼らを走ることに引き込みます。素人に近い彼らはハイジの計画に沿って、早朝練習、合宿、記録会、予選会へと進みます。

10人の中で私の好きなのが王子とユキ。漫画に囲まれて、ルームランナーを練習に使うのが王子。10人の中で一番遅いんですが、立川の昭和記念公園で行われる予選会のゴールで沿道の女性客の前で嘔吐してしまいます。一方ユキは司法試験に合格した秀才ですが、東京生まれなのに、正月も帰らず、家庭に何らかの問題を抱えているらしい。

彼らは何とか予選を突破したんですが、箱根本選では10区のそれぞれを担当した選手の戦いぶりと個々のエピソードが語られます。1区の王子は最下位でしたが、何とか食らいつきました。それから奮闘して、10位まで順位を上げましたが、体調を崩した山上り担当のブレーキもあり、18位で往路を終えました。山下りはユキの担当。凍った雪道を順調に走ってゆきます。ホテルの前で応援する再婚した母と、妹と義父がいます。彼らの姿を見て些細なわだかまりが溶けてゆきます。また9区のカケルは実力通り、活躍するか。最後のランナーはハイジ、しかし昔の傷が痛みだす……。最後まで走れるか、シード権はとれるか、結果は？

タイトルの「風が強く」とはどういう意味でしょう。ヒントは長距離選手に対する、ハイジの言葉「速さだけでは、長い距離を戦いぬくことはできない。（中略）選手に必要なのは、本当の意味での強さだ。俺たちは『強い』と称されることを誉にして、毎日走るんだ」「長距離は一生をかけて取り組むに値する競技なんだ」にあるのではと思います。

長距離選手ではありませんが、強い人で、私のそばにいる人を私は知っています。何と言ったって、山の神といわれる人ですものね。

（新潮社）